



現在、天皇家に新宮様が誕生したことがまたの大きな話題の1つにな

っています。「悠仁様」と名付けられたとのことで、メディアが「悠」の字の持つ意味のすばらしさを専門家を交え報道しております。私事ですが、自分の子供の名前にも「悠」を使っており、将来子供に命名理由を聞かれた時のための回答として参考になっております。

さて、今回のニュースレターでは、平成18年度産業応用部門大会の大会報告および平成18年度産業応用部門表彰者を掲載しました。大会報告では、多数の参加者による熱の入った活発な議論と参加者同士の交流の様子が紹介されております。是非ご覧ください。来年は、大阪での開催の予

定ですので、引き続き積極的な参加をよろしく願いいたします。

技術開発レポートでは、「ネットワーク接続の監視カメラ画像による侵入者検知装置の開発」を㈱明電舎の藤原様より紹介していただいております。昨今の防犯意識の向上により、これからのニーズにマッチした技術であります。研究グループ紹介では、高知工業高等専門学校電気工学科の紹介をしていただきました。文中の写真のサボニウス風車は、アートの的にも優れており、街中や公園での設置に適していると言われております。

最後に、ご多忙の中、原稿を執筆していただいた皆様、ならびに担当委員の皆様へ、厚く御礼を申し上げます。

エディタ 金 宏信 (東芝三菱電機産業システム)

【部門応用大会シンポジウムの連動企画として業界紙に座談会記事を掲載】

公共施設技術委員会

公共施設技術委員会は、今年度の部門応用大会で主催したシンポジウム「遠隔からの計測・監視・診断・保守技術」の連動企画として、座談会「公共施設における遠隔からの計測・監視・診断・保守技術と技術者の役割」を実施し、その内容がシンポジウム開催週の業界紙（水道産業新聞、8月21日号）に掲載された。

座談会の出席者は、各社の第一線研究者・技術者7名と、公共施設技術委員会委員長、副委員長、幹事（司会）、ユーザ委員の全11名で、内容は、公共施設技術委員会の活動紹介、各社一押し研究成果（遠隔からの計測・監視・診断・保守技術）、技術者としての考え（使命、存在価値、やりがい、課題、その他）、ユーザの期待、などを語り合っている。なお、当該の記事は、部門応用大会のポスターコーナーにも掲示された。

公共技術委員会では、従来からこのような連動企画に積極的に取り組んでおり、その目的は「公共プラントにおける電気分野のコア技術・注力技術と、公共施設技術委員会の活動内容を、広くアピールする」というもの。座談会のテーマは、極力シンポジウムテーマと連動させ、シンポジウムで発表の機会がなかった各社の成果も披露できるようにしている。

過去の記事履歴は以下のとおり。

1998.12.10 付「設立10周年記念記事～電気から上下水道技術を拓く」片面

2003.8.25 付「15周年座談会～15年の歩みと21世紀の技術を展望する～」見開き全面

2004.6.10 付「女性技術者が果たす役割と今後への期待」見開き全面

2005.8.29 付「公共施設におけるシミュレーション技術」見開き全面

2006.8.21 付「遠隔からの計測・監視・診断・保守技術と技術者の役割」見開き全面

記事の効果もあって、電気学会公共施設技術委員会の取り組みは、業界内で高い評価を得ている。